

ヘンリー・ジェイムズの子供たち ——『ねじの回転』に注目をして——

ハンフリー恵子

1

ヘンリー・ジェイムズ作品の中でも、『ねじの回転』 *The Turn of the Screw* (1898) ほどその解釈が大きく分かれる作品はないだろう。Orr は本作品を読む姿勢を大きく二つに分け、文字通り「ヴィクトリア朝ゴースト・ストーリー」(Orr 39) として捉える方法と、幽霊を家庭教師の「ヒステリックな精神の投影物」(Orr 39) として捉える方法を指摘するが、ここに『ねじの回転』批評の流れを見ることができよう。出版当時は額面通り受け止められ陰鬱な恐ろしい話として批判されたが¹、1920年代頃からは家庭教師の心理面への注目が集まり、E. Wilson のように「家庭教師の幻想」(Wilson 160) の物語として解釈された。その後も主人公の女家庭教師への信頼性、幽霊の存在の有無、語りの構造など、様々な論点からの解釈が展開され近年に至る²。

ジェイムズは、『ねじの回転』を書くきっかけとなったエピソードを、『覚書』の中に書き残している。1895年1月10日に、友人の家での夕食に招待されたジェイムズは、その友人の父でありカンタベリー大司教の E・W・Benson から、幽霊に憑かれた幼い子供たちの話を聞くのである。このエピソードは、ジェイムズに強い印象を与え、彼はその数日後、次のように『覚書』に書き記している。

The servants, wicked and depraved, corrupt and deprave the children; the

children are bad, full of evil, to a sinister degree. The servants die (the story vague about the way of it) and their apparitions, figures, return to haunt the house and children, to whom they seem to beckon, whom they invite and solicit, form across dangerous places, the deep ditch of a sunk fence, etc. — so that the children may destroy themselves, lose themselves by responding, by getting into their power. So long as the children are kept from them, they are not lost: but they try and try and try, these evil presences, to get hold of them. (Edel and Powers 109)

このオリジナル・アイデアに基づいて『ねじの回転』を読むならば、そこに登場する幽霊 (Peter Quint and Miss Jessel) は邪悪な存在なのであり、子供たち (Miles and Flora) はその悪に取り憑かれ彼らの世界に引き込まれてゆく犠牲者ということになる。こうした読みは、様々に繰り広げられてきた論争に、ひとつの結論を与えることとなるだろう。しかし、このエピソードはあくまでも、ジェームズの言う「萌芽 (germ)」に過ぎないことを考えると、ここで生まれた「芽」がどのように成長しどのような実をつけるのか、それを読み取ることが『ねじの回転』の真の解釈を行うこととなるのである。

2

ところで、『ねじの回転』が出版された1890年代は、ジェームズにとって大きな転機を迎えた重要な時期にあたる。意を決して挑んだ劇作への試みをあきらめ、小説の執筆に専念することを決意し、晩年の大作に向けたエネルギーを蓄える時期である。特に1890年代後半に出版された作品に注目すると、そこに興味深い特徴のあることに気付く。主な作品の主人公たちが「子供」であり、大人たちに囲まれた子供たちの目線で物語が描かれているのである。ここで言う「子供」とは、必ずしも幼子を意味するのみにとどまらず、その範囲は、親元から独立するまで、また結婚するまでの年

齢にまで広がる。『あちらの家』*The Other House* (1896) の幼子 Effie を皮切りに、『ポイントンの蒐集品』*The Spoils of Poynton* (1897) の Fleda、『メイジーの知ったこと』*What Maisie Knew* (1897) の Maisie、『ねじの回転』の女家庭教師と Miles & Flora 兄妹、「檻の中」“*In the Cage*” (1898) の電報係、そして『厄介な年頃』*The Awkward Age* (1899) の Nanda と Aggie と、就学年齢の子供から結婚を控えた女性までが、主人公として登場する。彼らの年齢が、必ずしも順調に上がってゆくわけではないが、概観して作品ごとに徐々に成長してゆくと捉えることは可能である。

ジェイムズの伝記研究の第一人者である L. Edel は、1890年代後半の作品群の特徴を“a remarkable sequence dealing with female children, juveniles and adolescents, written between 1895 and 1900” (Edel 480) と表し、ジェイムズの個人的経験からその特徴を説明する。彼は、この背後に『ガイ・ダンヴィル』*Guy Domville* (1894) の失敗で受けた心の傷 “emotional suffering” を癒したいという、ジェイムズの “unconscious self-therapy” (Edel 481) を見出すのである。

The little girls had this emerged out of a personal healing process during the years 1895–1900. ... Each tale had eased some of this emotional suffering, so that from story to story he had dispossessed himself of certain intensities of pain. (Edel 481)

Edel の指摘するように、『ガイ・ダンヴィル』での苦い経験が1890年代後半の作品群に影響を与えていることは確かである。しかしこれを “a personal healing process” という言葉のみで説明するには、まだ不十分であろう。

Shine は作品の子供たちの中に “moral growth” (Shine 24) を見出し、Maisie のようにまだ未熟な子供たちが、周りの大人たちの私情に振り回され、やがて大人たちの現実を理解してゆくさまに、彼女らの道徳的・精神的成長を読み取ろうとする。こうした子供たちの成長にジェイムズを重ねて読

むならば、現実を理解して受け入れようとする作者自身の姿を読み取ることとは可能であろう。Krookはこうした成長を“the moral constitution of young children” (Krook 109) と呼び、ジェイムズが子供たちを通して「純真さ innocence」と「墮落 corruption」の関係を描き出そうとしたのだと指摘する。確かに、ジェイムズの「子供たち」に共通して見出せるものは「純粋さ」と「墮落」への認識であり、子供たちがそれを「見て知る」ことである。まさに、Maisieが大人たちの世界を理解して「知ったknew」ように、子供たちは大人たちの世界に身を置いて、「現実社会」の実態を学び理解し、さらにそれを受け入れようとするのである。

この「現実理解」という点において、『ねじの回転』は他作品とは多少異なる要素を示す。というのも、家庭教師が認識してゆくものが「幽霊」という非現実的なものであり、これが、彼女が見出して理解してゆくものとなるからである。牧師の娘である二十歳の彼女は、初仕事として家庭教師の職を得てブライ邸に赴任し、そこで幽霊の存在 Peter QuintとMiss Jesselに気づき、彼らが狙う子供たちMilesとFloraを守ろうとする。そして彼女は、家庭教師としてMilesとFloraと接しながら、彼らの「純真さ」がQuintとJesselの影響を受けて「墮落」へと向かっていることを知るのである。つまりこの作品において、彼女が学び知る事実（すなわち現実）とは、幽霊の存在への理解であり、邪悪さへの認識ということになる。こうして『ねじの回転』においてジェイムズは、家庭教師がたどり着くべき「現実理解」に非現実的要素を混入させているのである。

3

では、家庭教師が学び知る「現実」とは具体的にどのようなものだろうか。二十歳で初めて実社会に出てきた牧師の娘が得たブライ邸での家庭教師という仕事は、彼女に大きな期待と緊張をもたらす。そして実際にブライ邸にやってきた時、牧師館という「私のみすほらしい家とは全く異なった壮大さ」(6)³がブライ邸にはあると感じ、彼女はその見事な美しさに圧

倒される。彼女は“commodious,” “lovely,” “sweetness,” “friendly,” “pleasant,” “greatness,” “decent” (6-7) などの言葉で彼女が受けた印象を表し、その晩は眠れないほどに興奮する(7)。そしてその屋敷の中にあつて、自分が「女主人か著名な訪問者」(6)であるかのように感じるのである。このときの家庭教師はこれから生活をする新たな環境を理解しようとしながら、一方で夢のような世界に身を置いて自分を「女主人」とするなど空想を膨らませていく。こうして、現実を把握すると同時に彼女の意識は非現実的な世界へと向かってゆくのである。

赴任直後の家庭教師は、まず子供たちのことを知り理解しようとする。初日に対面したFloraに対し、家庭教師はそのかわいらしい美しさに心を奪われ、彼女を「ラファエルの聖天使」(7)と呼び、Floraを彼女の空想世界の登場人物のように例える。一方、Milesとの対面の前に彼の学校から「放校通知」を受け取った彼女は、彼に対して不安を募らせるものの、しかし実際のMilesは「信じられないほど美しく神々しい存在」(13)として彼女の目には映り、彼の中に「見事なまでに甘美な純粋さ」(13)を見いだす。こうしたMilesの姿は、「放校通知」がほのめかすような「邪悪な」(19)要素が見当たらないという理由で、FloraとともにMilesも「物語の天使たち」(19)として認識され、彼もまた家庭教師の空想の世界の登場人物として受け取られるのである。こうして、子供たちを理解しようという彼女の現実への認識は、幻想的なイメージを事実として受け止める行為とすり替えられてゆく。つまり、彼女が学び知るものは、彼女が想像する空想の世界と同意義を持つに至るのである。

また、MilesとFloraのみならず、そもそもブライ邸での生活そのものが、家庭教師の想像力をさらに刺激する。彼女が初めて塔の上のQuintと遭遇することになる日、庭を散歩する彼女はそこを「ロマンティックで、高貴なる空間」(15)と考え、そこでの「自分の時間」(15)を楽しむのである。この時彼女は、自分がいかに見事に家庭教師としての職務を果たしているかを考える。

I could take a turn into the grounds and enjoy, almost with a sense of property that amused and flattered me, the beauty and dignity of the place. It was a pleasure at these moments to feel myself tranquil and justified; doubtless perhaps also to reflect that by my discretion, my quiet good sense and general high propriety, I was giving pleasure — if he ever thought of it! — to the person to whose pressure I had yielded. What I am doing was what he had earnestly hoped and directly asked of me, and that I *could*, after all, do it proved even a greater joy than I had expected. I dare say I fancied myself in short a remarkable young woman and took comfort in the faith that this would more publicly appear. (15)

ここで、自分の「思慮深さ」や「もの静かで善良なる感覚と隔々に行き渡った礼儀ただしさ」に言及する彼女には、自身に対する大きな自信が見られ、高い自己評価を下していることがうかがえる。こうした感情の高まりは、彼女に「並々ならぬヒロイズムの高まり」(28)をもたらし、そして彼女は自らを「この屋敷の静けさの守護者」(26)と呼ぶに至るのである。ここにロンドンで恋した雇い主に対する思いが加わり、彼女は「素敵な物語」(15)を作り上げてゆく。ここでも彼女は、ブライ邸での生活から空想の世界を構築し、それを彼女にとっての「現実」として認識してゆく。だからこそ、この頃彼女に届けられた実家からの手紙は、彼女にとっては受け入れられないものとなる。彼女は、ブライ邸以前の生活を想起させる実家からの手紙を「邪魔なもの」(20)と呼び、彼女が本来属す現実社会を切り捨て、想像の世界の深みに入り込んでゆくのである。

このような状況の中で、家庭教師は、子供たちと幽霊との関係の「真実」を突き止めてゆく。そして彼女は、天使のように純粹無垢なはずの Miles と Flora が幽霊たちの影響で邪悪な心を持つに至ったという「事実」を、子供たちに認めさせようとするのである。この行為は、彼女にとっての「現実」を子供たちにも受け入れるよう強いることを意味する。ここで問題となる

のが、家庭教師の言う「事実」、つまり子どもたちの「邪悪さ」とはどのようなものか、ということである。現実と空想を同一視する彼女が、どのような「現実・事実」を見出すというのだろうか。

そもそも家庭教師が子供たちの行動に不信感を抱くのは、彼女が Quint と遭遇した時から始まる。女中頭の Grose 夫人と Quint について初めて話した際、彼女が夫人に話す事実を夫人が疑うことなく信じてくれることに、家庭教師は徐々に興奮を覚えてゆく。そして、彼女は「子供たちは一度もこの件に触れたことがないんです」(26)と、子どもたちが全く Quint について話さないことに気づき、彼らに疑問を抱くのである。家庭教師にとって子供たちの隠し事は大きなショックとなり、こうして子供たちの穢れなき天使のイメージに疑念が沸き起こることとなる。言い換えると、彼女の幸せな空想の世界に影が差し始めるのである。

彼女はこうして Miles たちに対して「新たな見方」(38)を持つようになり、さらに子供たちが彼女に「嘘をついている」と考えるようになる。湖のほとりで遭遇した Jessel のことに一言も触れない Flora が、夜中にベッドを抜け出して外を覗き見しているとき、誰を見たのかと尋ねる家庭教師に Flora は“Ah no!”(42)と答える。家庭教師はこの時少女が「嘘をついていることを確信する」(42)のである。そして、この確信は夜中にこっそりと庭に出ていた Miles にも及び、この晩の出来事を彼女は Gross 夫人に次のように語る。

“... The more I’ve watched and waited the more I’ve felt that if there were nothing else to make it sure it would be made so by the systematic silence of each. *Never*, by a slip of the tongue, have they so much as alluded to either of their old friends, ...; but even while they pretend to be lost in their fairy-tale they’ve steeped in their vision of the dead restored to them. ...”

...

“... Their more than earthly beauty, their absolutely unnatural goodness. It’s a

game,” I went on; “It’s a policy and a fraud!”

...

“They have n’t been good — they ’ve only been absent. ... They’re not mine — they’re not ours. They’re his and they’re hers!” (48–9)

ここで家庭教師は、子供たちの沈黙を彼らの意図的なもの“systematic silence”だとし、彼らの美しさや善良さに不自然さを見出して、それらは巧みに作られたものだと結論付ける。これによって彼女は、Quint たちの邪悪な心に染まった子供たちを幽霊と同等の「邪悪なるもの」とみなすようになるのである。Siegelは、子供たちの墮落してゆく過程を“Now lying, which children can do, is next to pretending; pretending is next to hiding.” (Siegel 40) と表しているが、確かに家庭教師によると、Milesたちは「嘘をついて“lying”」おり、従って彼らの天使のような姿は「ごまかし“pretending”」の姿であり、彼らにはその事実を「隠す“hiding”」ずるがしこさがあるということになる。これが、彼女が認識する「現実」の子供たちの姿となるのである。そして家庭教師はMilesに手紙を盗み取ったことを告白させることで、彼女が認識する事実を確認を得ようとする。実際、Milesが手紙を盗ったことを認めたとき、彼女は「喜びの声」(85)をあげて彼を抱きしめる。

My eyes were now, as I held him off a little again, on Miles’s own face, in which the collapse of mockery showed me how complete was the ravage of uneasiness. What was prodigious was that at last, by my success, his sense was sealed and his communication stopped: ... (84–5)

これは、家庭教師が突き止めたブライ邸での「事実」がまさに彼女にとって揺るぎない「真実」となった瞬間である。Milesの「嘘“mockery”」は暴かれ、彼女の「不安“uneasiness”」は振り払われる。これは彼女の正当性が証明されたことを意味し、だからこそ彼女はこの瞬間を「私の成功

“my success”]と呼ぶのである。

4

しかし、家庭教師にとって彼女がブライ邸で学び知る「事実」が彼女の「空想」の世界と同意義であったことを考えた時、そもそも彼女が言う「事実」が何を意味するのか、その信頼性が問題となる。家庭教師が学び知る「事実」をGross夫人に語る態度に注目すると、実は彼女が巧みに「事実」を操作している様子が見えてくる。

Milesの放校通知が届いたとき、驚いた家庭教師はただちにGross夫人に相談をする。その理由を尋ねる夫人に家庭教師は学校からの手紙を見せるのだが、そのとき彼女は夫人が文盲であることに気付くのである。

My counsellor could n't read! I winced at my mistakes, which I attenuated as I could, and opened the letter again to repeat it to her; then, faltering in the act and folding it up once more, I put it back in my pocket. (10-11)

ここで家庭教師が、手紙を夫人のために読み上げるのではなく、その手紙をポケットに入れてしまうことに注目したい。つまり、彼女は夫人から事実の証を閉ざし隠してしまうのである。さらに、初めて塔の上にQuintを見た時、家庭教師はひどく戸惑ったものの、しかし彼女はその事実を夫人に話すことはしない。

Scarce anything in the whole history seems to me so odd as this fact that my real beginning of fear was one, as I may say, with the instinct of sparing my companion. On the spot, accordingly, in the pleasant hall and with her eyes on me, I, for a reason that I could n't then have phrased, achieved an inward revolution — offered a vague pretext for my lateness and, with the plea of the beauty of the night and of the heavy dew and wet feet, went as soon as possible

to my room. (18)

ここでも家庭教師が意図的に Quint との遭遇を Gross 夫人から隠している様子がうかがえる。家庭教師は、夫人に彼女が知り得た事実を提供して常に相談しているように見えながら、実は彼女の知るすべてを夫人に話しているわけではなく、狡猾に選んで話しているのだと考えることができる。

また、家庭教師が情報を操作する姿は、彼女が湖の辺で見た女性のことを夫人に語るときにも見られる。興味深いことにこの時の家庭教師は、夫人と語る前に、先ほど目撃した女性が Jessel であると既に自ら結論付けている。

“Miss Jessel. You don’t believe me?” I pressed.

She turned right and left in her distress. “How can you be sure?”

This drew from me, in the state of my nerves, a flash of impatience. “Then ask Flora — *she’s* sure!” But I had no sooner spoken than I caught myself up.

“No, for God’s sake *don’t!* She ’ll say she is n’t — she ’ll lie!”

Mrs. Gross was not too bewildered instinctively to protest. “Ah how *can* you?”

“Because I ’m clear. Flora does n’t want me to know.” (31)

ここでの家庭教師は、自分が語ることにゆるぎない自信を持っており、それを粉う方なき「事実」として一方的に夫人に展開してみせる。彼女は夫人を自説へと誘導し、夫人の信頼を得ることで、自説を「真実」へと高めてゆくのである。こうして、彼女が見出していく「真実」は、彼女自身によって巧みに組み立てられているのだとすることができる。

このような家庭教師の態度は、実は彼女が批判する Miles たちの姿を彷彿とさせるものである。事実を隠して (“*hiding*”) 自説を展開する (“*pretending*”) 態度こそ、家庭教師が「邪悪なもの」と結論付けた Miles たちの姿で

はなかったか。さらには、家庭教師の「嘘つき“lying”」の姿をも見ることができる。ロンドンにいる叔父に会いたいという子供たちに、家庭教師は「手紙を書いたらどう？」(53)と提案をする。しかし、彼女はその手紙を「文章を書く練習」(54)にすり替えてしまい、「上手に書けているので投函するのはもったいない」(54)という理由で、「彼女が保管する」(54)ことにする。つまり、家庭教師は子供たちに対して「嘘をつき」、自分の都合に合わせて状況を作り変えているのである。結果として、Quintらを邪悪な存在と呼び、MilesとFloraをその悪に染まった存在と呼んで、自らを子供たちの救世主として位置づけた彼女の言動からは、その信頼性が失われてゆく。

これにより、家庭教師が主張する「邪悪」なもの存在自体も曖昧になる。家庭教師の言葉を信じるならば、Coveneyの指摘するように「子供たちは墮落の餌食となっている」(Coveney 209)となり、家庭教師のことを疑うのであれば、Shineの言うように子供たちは「その階級と知性を持つ子供たちならごく普通に行うであろうことを行っているに過ぎない」(Shine 138)となるであろう。MilesとFloraの視点に立つならば、彼らが見ていたものは、次第に現実と空想を一体化させ、子供たちの告白を求める鬼気迫る家庭教師の姿であったかもしれない。ジェイムズは、このようにして家庭教師に対する不確かな信頼性を構築して、「語り手」としての彼女の立場をも否定してゆくのである。

5

この作品の冒頭で、『ねじの回転』の基本構造は、ブライ邸での出来事から数十年経った後のクリスマスの晩にダグラスがパーティー客を相手に家庭教師の経験を語るものであることが紹介される。しかも、ダグラスの話をパーティー客の一人である「私」が書き留めたという仕組みであることが読者に示されるのである。このような構造は、読者を、「私」のそして「ダグラス」の語りの枠にはめることになる。そして、この枠の中で、ダグ

ラスは家庭教師を「最も魅力的な人」(2)であり「私が知る限りその職にある人の中で最もふさわしい人」(2)であると紹介する。彼は、「彼女は子どもたちのために実に見事にやってみせた」(5)とその仕事ぶりを高く評価し、「最も立派な人物」(5)として彼女の家庭教師としての資質を保証するのである。つまり、読者は、家庭教師への信頼性を保証された形で物語の枠の中に導入されることになる。

このように読者を物語の枠にはめてゆく構造は、家庭教師の語りの中でも繰り返し見受けられる。勉強部屋の窓から部屋の中をのぞき見る Quint は、家庭教師の視点からは文字通り「窓枠」にはめられているのであり、ベッドから抜け出した Flora を家庭教師が見つけたときもまた、窓の外を見ていた Flora は「窓枠」にはめられた姿なのである。さらに Flora が見ているものを確かめようと別の窓から家庭教師が窓の外をのぞき見たとき、彼女が見つけた Miles もまた、家庭教師の視点からは「窓枠」にはめられたものとなる。つまり、彼女が子供たちや幽霊について語る時、彼女が見ているものは枠にはめられた「絵」のようなものであることが分かる。結果、彼女が見つけた「事実」とは、枠の中という限られた領域で得られたものにすぎず、彼女はその枠から離れて立ち、まるで絵画を鑑賞するかのよう、子供たちや幽霊らの関係を観察しているという位置関係が見えてくる。

この「窓枠」は、Miles を Quint から守ろうとする最後の場面でも多く登場する。食事の後で家庭教師と話をする Miles は窓際に立ち、度々外をのぞき見ている。つまり家庭教師が対面して見る Miles の姿は窓枠に囲まれているのである。この後、家庭教師の質問には答えず外へ出ようとする Miles を、彼女は「もう一度窓際にとどめよう」(84)とする。そして窓に背を向けて立つ Miles のもとに Quint が姿を見せるのである。

Peter Quint had come into view like a sentinel before a prison. The next thing I saw was that, from outside, he had reached the window, and then I knew that,

close to the glass and glaring in through it, he offered one more to the room
his white face of damnation. (85)

ここに現れた Quint は、言うまでもなく、窓枠に囲まれた姿である。窓に対面する形で位置する家庭教師の視点からは、この時の Miles と Quint は同じように枠の中に入っている。そして彼女の見る「絵」が現実のものであると確信しようとするかのように、彼女は Miles を手に入れようと強く胸に抱きしめる。しかし、彼女が Miles を胸に抱いた時、彼の小さな心臓は鼓動を止めてしまう。「枠」の中から「真実」を手に入れようとしたとき、それが手に入らないものであることを示すかのように、Miles の死によって彼女は拒絶されてしまうのである。つまり、彼女がたどり着いた「事実」とは、所詮「枠」の中だけのもの、限られた世界の中での認識であることが提示されるのである。

この結果、彼女が語る「事実」からは現実味が失われ、読者は彼女の言動に疑念を抱かざるを得なくなる。そしてこの疑念は、彼女が主張する幽霊の存在や子供たちの墮落した姿へと及び、彼女が見出したとする「真実」は、結局彼女の「空想」の産物であったことが明らかになる。こうして読者は、家庭教師が実は「現実」を認識していないのだと知らされるのである。

ジェイムズは、「現実」を認識しようとしながら「空想」に左右される若い女性の姿を、「檻の中」(1898)でも描いている。『ねじの回転』と同時期に書かれたこの作品でもまた、結婚を控えた女性が、Cocker's store の片隅の小部屋で電報係として働きながら、電報の内容から Captain Everard と Lady Bradeen の隠された関係に気付き、彼らを助けなければならないと思うまでに至る。「檻の中」という限られた空間の中から外を眺めるこの電報係にとって、彼女の眼に映る光景は、同然のことながら「枠」に囲まれたものである。そして、Captain Everard らの関係についての限られた情報を空想で補いながら、「真実」を突き止めようとするのである。次第に Captain Everard

に特別な感情を抱くようになった彼女は、彼女の空想の絵をさらに広げてゆく。しかし作品の最後で、彼女の信じていた「事実」は、本物の「事実」を突き付けられて否定されることになる。つまり、家庭教師がそうであったように、電報係が「見て知った」事実は、所詮彼女の「空想」の産物に過ぎなかったことが最後に示されるのである。

こうしてジェイムズは、家庭教師や電報係に「現実」を学んで認識することを求めながら、その一方で彼女たちから「現実」を奪い取っている。限られた枠の中からはしか現実をのぞき見ることを許されない彼女たちは、空想によって制限された情報を補おうとし、やがてその空想が彼女たちの「現実」を構築し始める。こうして、「現実」を見ていたはずの彼女たちは、知らずして自分の信じる「現実」の物語の中に陥り、真の姿を見ていないという皮肉な結果に至るのである。

6

ジェイムズの19世紀末作品の子供たちは、大人の世界つまり現実社会に身を置くことで、そこで見出される「事実」を「学んで」ゆく。Maisieは実父母や義父母の身勝手な姿という「現実」を理解して自立する姿を見せるに至るのだが、しかし、ジェイムズの子供たちが知る「事実」が必ずしも「社会の現実」であるとは限らない。家庭教師や電報係のように、彼らが見出したと信じる「真実」が、実は空想の産物に過ぎないことが明かされ、彼らの真実追求の姿勢自体が完全に否定されるのである。ここに、彼女らが「現実」と「幻想」を区別しきれない、「観察者」としての未熟な姿がある。

ジェイムズの子供たちには、豊かな想像力が与えられている。Maisieは、義父を「本物の紳士」(James Maisie 61)と信じて彼との生活を夢見ながら、義父と義母の関係という「現実」に気付き、彼女の幻想は打ち砕かれる。また、FledaはOwenとの結婚の可能性を目前にして夢を抱くものの、結局彼が別の女性Monaと結婚するという「現実」を学び失望する。そして、「檻

の中」の電報係も、彼女の幻想が砕かれた後、婚約者の元に戻り結婚をするという「現実」を受け入れている。つまり、彼女らは一様に、彼女らが観察する「現実」の中に空想をめぐらし、それを打ち砕かれて「現実」を学ぶことになる。この意味で、家庭教師は彼女らとは異なる。家庭教師が見出したと信じる「事実」を打ち砕かれた後、彼女が「現実」を再認識する機会は与えられないのである。ここに、ジェイムズが『ねじの回転』を幽霊小説にした理由がある。

ジェイムズはニューヨーク版の『アメリカ人』に付した序文の中で、彼が小説の中で扱うものは「我々の低俗な社会に付随する状況の不自由さから完全に解放された中で働く経験」(James Art 33)であると説く。その上で、この「解放された経験」を「気球“the balloon of experience”」に例え、読者はその気球と地上をつなぐ非常に長い綱が許す範囲で漂いながら「想像力のかご“car of the imagination”」(James Art 33)に乗って楽しむのだとする。家庭教師の視点からのみで語られる『ねじの回転』では、読者は家庭教師の目線に立ち、彼女が構築する空想の世界に誘われ、彼女が説く「真実」を信じることを求められる。しかしその時ジェイムズは、読者の知らないうちにこっそりとその綱を切ってしまうのである (James Art 33)。こうして、読者は現実社会から切り離され、家庭教師の空想の世界の深みへとハマってゆく。知らずして家庭教師が提示する「事実」を現実のものとして認識していた読者は、最後に彼女の認識が否定されたとき、ジェイムズに大きく裏切られることになる。そしてこのとき読者は、切り離された「地上」と「気球」との距離に気づかされるのである。

また、ジェイムズは『ある夫人の肖像』に付した序文で、読者と作品の関係を、家の外にいる読者が家の中で繰り広げられるフィクションの世界を窓ガラス越しに覗き見するという位置関係で説明する (James Art 46)。読者は、地上から切り離された「気球」に乗って漂いながら、「人間の世界を見下ろすようについている」(James Art 46) 窓から覗き見ているというのである。そしてこれは、ジェイムズが『ねじの回転』で構築した家庭教師

の世界とも重なる。「現実社会」から切り離され「空想」の世界にはまり込んだ彼女は、枠にはめられた光景を眺め見ている。つまり、家庭教師がもつとめる「現実認識」は、ジェイムズが読者に問うている「現実」と「フィクション」の世界の位置関係であったと言えるだろう。

ここにこそ、『ねじの回転』が他作品と異なる性質を持つということに意味がある。ジェイムズの子供たちが、現実を理解するという明確な「現実認識」の過程のみにとどまらず、そこに幽霊という非現実的なものへの認識を重ねることによって、ジェイムズは、現実社会とフィクションとの関係への理解をも読者に求めているのである。このような複雑な構造は、『ねじの回転』が幽霊小説という他作品とは異なる性質を持つがために、可能となることである。実はこうして、ジェイムズ自身もまた、「現実」と「空想」との理想的な距離を模索していたのではないかと考えることもできるのである。

注

- 1 例えば「これほど気分が悪くなるような、必要以上に陰鬱な話がかつて読んだことがない」(Hayes 304)や「ジェイムズ氏はどうかしているのだ」(Haralson 79)などの批判があった。
- 2 『ねじの回転』への批評の変遷については、Reedの論文の中に詳しくまとめられている。
- 3 James, Henry. *The Turn of the Screw*. Ed. Robert Kimbrough. New York: Norton, 1966. 本論において、テキストからの引用はすべて括弧内にそのページ数を算用数字で表すものとする。

引用文献

- Coveney, Peter. *The Image of Childhood*. New York: Penguin, 1967.
- Edel, Leon, and Powers, Lyall H. eds. *The Complete Notebooks of Henry James*. New York: Oxford UP, 1987.
- Edel, Leon. *Henry James: A Life*. London: Harper & Row, 1985.

- Haralson, Eric. *Henry James and Queer Modernity*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Hayes, Kevin J., ed. *Henry James: the Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- James, Henry. *The Art of the Novel: Critical Prefaces*. Ed. Richard P. Blackmur. New York: Charles Scribner's Sons, 1934.
- . "In the Cage." *The Novels and the Tales of Henry James*. Vol. 11. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelly, 1979.
- . *The Spoils of Poynton*. *The Novels and the Tales of Henry James*. Vol. 10. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelly, 1979.
- . *The Turn of the Screw*. Ed. Robert Kimbrough. New York: Norton, 1966.
- . *What Maisie Knew*. *The Novels and the Tales of Henry James*. Vol. 11. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelly, 1979.
- Krook, Dorothea. *The Ordeal of Consciousness in Henry James*. London: Cambridge UP, 1962.
- Orr, Leonard. *James's The Turn of the Screw*. London: Continuum, 2009.
- Reed, Kimberly C. "'The Abyss of Silence' in *The Turn of the Screw*." *A Companion to Henry James*. Ed. Greg W. Zacharias. New York: Blackwell, 2008. Chichester: John Wiley & Sons, 2014.
- Shine, Muriel G. *The Fictional Children of Henry James*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1969.
- Siegel, Eli. *James and the Children*. New York: Definition Press, 1969.
- Wilson, Edmund. "The Ambiguity of Henry James." *Hound and Horn* 7 (1934): 385-406.